



ひとつ



海援隊旗(二隻きの旗)

<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/>

暑い、熱い“夏”に！ 「ほいたら待ちゆうきー龍馬ー」 幻冬舎から発売！「拝啓龍馬殿」をまとめる 龍馬検定は中級開始へ

坂本龍馬記念館にとって、重要な二つの事業がこの夏、始動する。

「拝啓龍馬殿」をまとめた「ほいたら待ちゆうきー龍馬ー」の出版が7月末、幻冬舎から全国発売になる。370頁を越える分厚い一冊は龍馬が語る“人生の辞書”である。

「龍馬検定は」いよいよ初級から「中級」へステップアップだ。中級からは有料になる。当然、チャレンジした合格者には賞品を準備している。11月実施予定の「上級試験」に向けての大事な布石となるだけに問題の内容吟味に現在、学芸員が頭を捻っている。

「ほいたら待ちゆうきー龍馬ー」を、ご期待！

私は今、「拝啓龍馬殿」、その本の出版に直接関わっています。当然皆さんより一足早くその手紙を読ませていただきました。目についたのが「とうとう」「ついに」「やっと」。龍馬記念館へ、桂浜に来た思いの書き出しです。みなさん恋焦がれて来られるわけです。しかも、繰り返し何度も。人生の岐路、行き詰まりの相談、失恋、結婚、一大告白だってあります。その結末を再び報告に来る。まさに、龍馬の魅力だと思います。こんなことも考えてみました。なぜ龍馬に手紙を書きたくなるのだろうか？ 決して届か

ない手紙なのに“

ちなみに調べてみると、国内に人物記念館・記念室と名の付くものは300以上あります。その中に西郷隆盛、吉田松陰、宮沢賢治など、いろいろ登場します。しかし何れも“手紙を書きたい”と思わせる人物には出くわしません。わざわざ手紙を書きたいと思わないのです。それなのになぜか龍馬になら手紙を書きたくなってしまうのか？ これは驚きでした。ふつと、頭をよぎりました。ひよつとしたらこれは龍馬が手紙を書かせているのではないか！世間へのメッセージとして、納得しました。そんな思いつきの本を、私

たちはまもなく世に送りだします。

題して、「ほいたら 待ちゆうきー龍馬ー」それでは待っていますからIIの意味です。待っているのは龍馬。この本は、龍馬が世に送る“人生の辞書”なのです。

ほいたら 本屋で待ちゆうきね。

出版会社社長 新本 勝庸



坂本龍馬 検定!

上級編では

研究書も必要!

龍馬検定初級編が四月十日にスタートした。約二ヶ月

で、のべ二万人が受験しており、順調な滑り出しだといえる。初級編を受験された方の反応は両極端である。一般の方は「難しい」という感想が多いが、龍馬ファンの方は「楽勝という感想が多い。」

中級編は八月初め、上級編は十一月十五日を目途に現在作成中だが、初級編の反応を受けて、当初の予定を少し変更した。まず中級編だが、以前は、二度目の受験は二ヶ月ほど間を空けないと挑戦できないシステムにする予定だったが、何度も受験できるようにする。また、上級編の受験資格は、中級編合格(八十点以上)の条件を付けていたが、それを撤廃する。その他の変更はない。受験料は中・上級ともに千円。合格認定証は中級編が八十点、上級編は九十点以上の方に発行する。

中・上級編の対策としては、やはり小説ではなく、研究書などをお読みいただきたい。お勧めの本は、

- ・平尾道雄「龍馬のすべて」
 - ・土居晴夫「坂本龍馬の系譜」
 - ・宮地佐一郎編「龍馬の手紙」
- などである。この他にも多数の良い参考文献があるので、これを機会にぜひ史実の龍馬を知っていただきたい。

三浦 夏樹

出会い演出の達人龍馬！

—以蔵と海舟—

●六月二十三日〜八月三十一日

出会いの達人龍馬展も後半に入った。後半は、龍馬にとって恩師と呼べる人々を中心に紹介する。天下の人物論を述べた慶応二年（八六六）十二月四日

えた河田小龍やジョン万次郎。砲術師範であった徳弘董斎。経済に明るかつた由利公正などがある。幼なじみの平井収二郎は「龍馬

幕府が正学として位置付けたもので、今の義務教育にあたるようなものになる。したがって、武士である以上、強制的に学ばなければならなかった。勉強という文字は、勉強も「無理に何かをさせる」というような強制的な意味がある。それに対して、「学問」は「疑問に思ったことを学ぶ」のであるから、自発的な意味になる。龍馬は、黒船が来た時や、脱藩してどうすれば

出会いの達人 龍馬展



ば良いか迷った時に、河田小龍や勝海舟を訪ねて行き、大いに学んだ。「耳学問」は、まさに龍馬らしい学び方である。龍馬は、勉強はできないかったかもしれないが、学問は好きだったのではないだろうか。その他恩師編では、岡田以蔵も取り上げる。以蔵は勿論、恩師ではない。しかし、龍馬の紹介で、恩師

“出会いの風強し、天気快晴” 会場に不思議な勇気

記念館での新たな試みで、あいを演出した「もう一つの展覧会」展がスタートしました。アーティスト15名の作品を2階の常設展示、歴史資料の中に配置しました。全く異質の「モノ」の出会いだけに、入館者の苦情などが心配されていましたが、ところが予想に反して、アンケートなどにもそうしたクレームはなく、逆に「面白い」「良かった」などのコメントが残されており、いつもと違う、調和が変った雰囲気を出しています。

- ・秋山先生の洋画、に描かれた作品の楽譜と溶け合
- ・伊与田先生の和かしこに時節を桐野先生の写真の中に秘めたる
- ・国吉先生の洋画、が見えるでしょうか？
- ・龍馬と並ぶ沢田馬と共に鮮やか
- ・高松先生の書風、強弱を感じます。
- ・竹内先生の書と門下生の作品、のびのびと賑やかです。
- ・武内先生の洋画、虹色の涙で溢れています。
- ・田中先生の書の数々、大胆で勢いがあります。
- ・筒井先生の洋画、水色の象との穏やかな出会いが心地よいです。
- ・西村先生の音楽、風になった龍馬が爽やかに吹いてゆきます。
- ・濱崎先生の洋画、光を受けて変化する画面の面白さに時間を忘れます。
- ・森木先生の立体、流木から生まれ変わった魚は羽を付けて今にも飛んで行きそうです。
- ・山岸先生の俳画、自詠句がしつとりと空間の中に納まっています。
- ・吉松先生の洋画、海を背景にダンスする人々の息遣いが聞こえてきそうです。

中村 昌代

人」と表現している。大道とは、広辞苑によると「人のふみ行う正しい道」とある。大久保は龍馬が大道を理解している人物と見たからこそ、腹を割って、大政奉還策のことを話したのだ。

この三人の他にも、剣術の師である日根野弁治。海外のことを教

である勝海舟の護衛をしたことがあるので、関連人物として紹介する。龍馬は単に「出会いの達人」だっただけでなく、「出会いを演出する達人」でもあったのだ。恩師編では、龍馬が大きな影響を受けた九人を紹介する。三浦 夏樹

●記念館を会場に

「愛媛・高知交流会議」開催

愛媛、高知両県知事大いに語る

五月二十八日、加戸守行・愛媛県知事と尾崎正直・高知県知事が、これからの愛媛、高知両県のあり方などについて、龍馬記念館を会場に大いに語り合いました。会議に先立ち二人は館長と学芸員から龍馬についての話を聞いた後、海を望む二階の空白のステージに設けられ

た会場で会議が開催されました。まず、尾崎知事が「坂本龍馬の縁によってこんな素晴らしい会場で話をする事になりました」とあいさつ。その後、「四国は住みやすくよい所だ」というアピールで定住者を増やし、両県のみならず「四国」という枠で国内外の観光客誘致や貿易の振興を図っていくこと。高速度の整備促進や中山間地域の財源問題など、多岐にわたる課題への連携協力の確認をしました。



会議終了後、海を眺めながら龍馬のことなど語り合う加戸知事(右)と尾崎知事=空白のステージで

スタンバイ 『海援隊約規物語』展

10月1日から開催

生き方が分からない。行き先が分からない。出口が見えない。多くのジレンマを抱えた「今」という時代の焦燥が、龍馬という人を救世主のように求めています。多くの人が求めている「龍馬」という人はいったい何者なのか。その手がかりとなるのが「海援隊約規」という海援隊の五つの規則を書いたものです。その資料を読み解く作業は、龍馬が立ち上げた自由組織「海援隊」にあるでしょう。



「海援隊約規物語」展は二部構成で、前期は「誇りに生きる（一族の証）」、後期は「海援隊魂とはひたすら、熱く」としています。龍馬亡き後の坂本家に伝わった「海援隊約規」は、北海道に渡った後、巡り巡って縁戚の弘松家に伝わりました。そして現在では、寄託資料として当館が預かりしています。約規と龍馬書簡二通が納まる巻

「海援隊約規物語」展は二部構成で、前期は「誇りに生きる（一族の証）」、後期は「海援隊魂とはひたすら、熱く」としています。龍馬亡き後の坂本家に伝わった「海援隊約規」は、北海道に渡った後、巡り巡って縁戚の弘松家に伝わりました。そして現在では、寄託資料として当館が預かりしています。約規と龍馬書簡二通が納まる巻

春猪へあてた 不思議な手紙

京都国立博物館 宮川 禎一



1 手紙の内容

坂本龍馬の研究には彼の残した手紙を検討することが不可欠だ。しかしそれはまだまだ十分とはいえない。ここでは春猪へあてた龍馬の書簡一通について内容を検討し、その位置づけと意義について考えてみたい。

宮地佐二郎の『龍馬の手紙』(講談社学術文庫、二〇〇三年)は龍馬研究には必携である。その中の二八四頁、五〇番、慶応三年二月二十日、姪春猪あての書簡を検討の対象とした。

書簡の現所有者はNPO法人北海道坂本龍馬記念館実行委員会である。筆者は今年五月三〇日に手紙を実見する機会を得た。書簡は縦二五・五センチ、横五三・七センチ。軸装されている。

宮地先生はこの手紙について「書簡は平明軽妙な口語調で、音曲的浄瑠璃調のリズムで進められ(中略)長崎より高知の姪(権平の一人娘)「ふぐの春猪ど」に送った文で、龍馬の赤裸々な人間が伝わってくる」と記している。しかし果たしてそれだけの意味なのだろうか。

まずは手紙を見てみよう。
春猪どのよ。此頃ハあかみちやとおしろういにてはけぬりてぬりくつばちしつまついたらよまちのくハしや

のばあがついでかけこんべいとふのいがたに日のあだだ御そあだんもまそうというくらのいことか。

をばてきのやんかんそふもこのころハ、ちとふやりくと心も定めかねをりハすまいかと思ふぞや。たいていことなり候や、二丁目へすてしめてもよからふのふ。

おまへ八人から歩もたして、すといつて男ハ皆にけだすといふ、きつつかいもなし。又やつくともすいふんたまたまかなハ、何もきつつかいせぬけれども、是からさきのしんふあいくちりとりにもかきのけられず、

かまでもくはでもはハられず、ふいぶんくせいでしてながいをしをくりなよ。私ももし死ななんだりや、四五年にうちに、かへるかも露の命ハはかられず。

先、御ふじで、をくらしよ。正月廿日夜
りよふより
春猪様
足下

意味不明な部分も多いが、従来の研究を参照しながら意識しよう。「春猪どのよ。春猪どのよ。近頃はあかみち屋(高知城下の化粧品店)かのおしろうい、そのあはたのある顔をけけぬり、こてぬりしているのか?もしつまついたら、それでもつまつくほどのデコボコなら

ば、横町の菓子屋の婆あのとこでかけ、金平糖の餅型に日(ごう)やたら餅型に砂糖が埋まっ平滑になるように顔がつるつとなるのかを)御相談しようか、という具合だろうか?

かんしゃくもこの頃ハすこしやわらかい感じ(ふやりふやり)で、おだやかに(心も定めかねて)いやしなかつたと思ふよ。上町二丁目(坂本家)へすてしめてもよからうのう。

お前(春猪)は八人から歩もたしてたして、男といふ男は皆逃げ出すので、気づかしくも大丈夫。またあいに(やつくと)心もしつかりすきていので私はなにも気づかないよ。

けれども、これから先にはさまざまな心配事が出てくるだろうよ。それは塵取でもかきのけられず、鎌でも扱われないかもよ。すいぶんずいぶん精を出して、これからの長い人生を送りなよ。

私ももし死ななかつたら、四五年の内には土佐へ帰るかもしれん。でも露の命は計られないもの。まずまずご無事で暮らさしよ。正月廿日夜
りよふより
春猪様
足下

とても親しい間柄であればこそ書くことができる、からかいや悪口を含んだ文章である。「お前は男という男が逃げ出す」などとはいくら春猪あてとはいえず、どすきる。冒頭も含めほぼ三分の二には妙なテンションの高さを感じられる。その一方で末尾には「露の命ははかられず」などと気弱な内容が記される。全体に不思議な内容。日付は「正月廿日夜」。

2 いつ書かれた手紙なのか
筆者は、この手紙は従来置かれてきた慶応三年一月の長崎で書かれたものではなく、本当は慶応二年の二月二十日夜に京都の薩摩藩邸で書かれたものではないか、と考えている。

慶応二年二月二十日は龍馬にとっても日本史においても重大な日である。龍馬は下関から三吉慎蔵や池内蔵太らとともに上京していた。そしてこの日龍馬と内蔵太らは伏見の寺田屋を出て、薩摩と長州の同盟交渉の結果を知るために京都二本松の薩摩藩邸を訪ねた。そして先に入京していた桂小五郎から交渉の停滞と失敗そして帰国の意思を聞いたのだ。それに驚愕した龍馬は西郷・小松らに会い再度交渉を進めるように強く促したのである。小説などではクライマックスとなるあの日である。

実はこの二月二十日に書かれた別の手紙がある。池内蔵太家族あて書簡(『龍馬の手紙』二八四頁の二六番)である。その内容は活字だけで伝わっている。重要な手紙である。

「先日大坂二日申候時ハ、誠に久しぶりにかせ引もふし葉六ふく計のみたれ、ゆへなくをり申候。夫が京に参り居候所、又昨夜よりぬつありて今夜ねられぬ申。ふとあとさきおもいめぐらしかけ候計と存じ、此ころハ杉やのをばあさんどのよふ二なされてをるふとも思ひ(中略) 正月廿日(以下略)」「冒頭部のみ引用)

この手紙は池内蔵太とともに上京していたからこそ書かれた。龍馬は京都で「風邪をひいて熱があり眠れないため、ふとあとさきのことをおもいめぐらし」たのだ。この池内蔵太家族あての手紙には故郷を離れて活動する志士の本心が綴られている。また土佐の知人らへの気遣いも記されている。しかし京都で内蔵太と一緒であることや今何をしているのかには全く触れていない。同盟交渉が秘密だからであろう。

この池内蔵太家族あての手紙もまた

科警研が鑑定、同一否定する材料なし 多分、龍馬につこり

憶測、推理、謎が多いのも魅力のうち。龍馬にまつわる話である。龍馬の妻、お龍についても論議のタネがある。彼女が「美人だったか」そうでなかつたか?

お龍と確認済みの老年期の写真が残されている。しかし、この写真から若い姿を想像するのは難しい。まるで20代と思われる美人の写真が現れた。出所もいい。ところが、やっぱり真偽に関して相反する二つの意見が対立した。

そんな折、京都国立博物館の学芸員、宮川氏のご協力で科学警察研究所の鑑定という新しい挑戦が実現した。「科警研」は本来の事業外としながらも、学術的意味ありということ、快く引き受けてくださった。待つこと4ヶ月、鑑定書が届いた。

「2枚の写真が同一人物かどうかについて、否定する材料はない」。つまり、消極的ながら同一とのニュアンスを持たせた鑑定。仮に30代、40代の写真がそろっていたなら恐らく「同一」の判定が下っ

ていた、と思う。鑑定書の行間に読み取れるのだ。早速地下2階の展示室の一面に、「お龍さんのコーナー」を設け、鑑定書と一緒に展示した。「科学の眼」。今のところなんのクレームもない。案内板で胸なでおろしているのは龍馬かもしれない。 森 健志郎



ていた、と思う。鑑定書の行間に読み取れるのだ。

早速地下2階の展示室の一面に、「お龍さんのコーナー」を設け、鑑定書と一緒に展示した。

「科学の眼」。今のところなんのクレームもない。案内板で胸なでおろしているのは龍馬かもしれない。

3 「おしろうい」の謎

また「おしろうい」の表現についても特徴がある。龍馬はこの「慶応二年」二月二十日の手紙で「おしろうい」をハケ塗りコテ塗りして「など」とひどく春猪をからかっていた。それを気にしていたためか(長崎から)外国製のおしろういを送ります。したたかお塗りください」というフォロワーの手紙(『龍馬の手紙』五五九頁、坂本春猪あて書簡)を慶応二年の秋に書いた、と考える方が内容の先後関係が自然である。

とりあげた春猪あての手紙は文章に切迫感がなく、平和にも感じられるため、すぐには理解されづらいであろう。しかし改めてこの手紙を慶応二年二月二十日に置いてみたならば納得できることが多いのではなからうか。実物の行方が分からない同日の池内蔵太家族あての書簡が出てくるならば、紙質やサイズ・書風などの比較からこの推定は確実になるものと予測しておく。

龍馬が春猪へうつすとした「遺書」を書いたこのときの気持ちもとても重要である。この手紙こそ薩長盟約の締結前夜における龍馬の心の奥底を窺い知ることのできる、まことに貴重な一通といえるのである。

考古室長 考古・歴史資料担当 (みやかわ・ていいち)

特集陳列「坂本龍馬」7月23日～8月31日開催(京都国立博物館)

拝啓龍馬殿

87通

3月21日～6月20日



12年ぶりの高知です。やっぱり高知はいい所やね！僕は今月の25日から社会人として就職します。その前に、どうしても一度高知へ行ってみて、あなたの足跡を辿って、成長したかったんです。昨日は太郎川、葦ヶ崎までの脱藩の道歩きしました。今日は和霊神社、柴巻の八畳石と回って、今ココにいるわけなんです。海が綺麗ですね(笑)。あなたが歩いた険しい道を実際に歩いてみて思ったこと。やっぱりおんじは凄いです！あれだけ山道を歩いたら、そりゃ海が好きになるよな(笑)。とにかく、あれだけ険しい道歩いたら、からこそ、あなたはでっかい仕事が出来たのだと思う。僕も今回あなたが辿ってきた道を歩いて、相当自信になった！とありあえず、日本の営業マン目指してカンパります！また来ます！それじゃあな！

3月22日 愛知県 M・Y 22歳 男性

3月24日 静岡県 Y・T 14歳 男性

3月29日 兵庫県 W・U 12歳 男性

3月30日 愛知県 T・Y 45歳 女性

4月11日 A 女性

4月19日 愛媛県 M・Y 64歳 女性

4月27日 千葉県 G・M 40歳 男性

4月12日 兵庫県 T・S 36歳 女性

僕は小学5年生のとき、坂本龍馬の伝記を読みました。龍馬という名前も何も知らなかったけど読んでみました。すると、読んでいくほど、龍馬のゆうかな姿にはまっていきました。今では、龍馬さんの大ファンです。坂本龍馬記念館を見学して、龍馬さんのことを今までよりずっとくわしく知れたと思います。記念館に来て良かったです。

3月29日 兵庫県 W・U 12歳 男性

3月30日 愛知県 T・Y 45歳 女性

4月18日 沖縄県 Y・U 17歳 女性

4月19日 愛媛県 M・Y 64歳 女性

4月24日 大阪府 Y・N 男性

4月27日 千葉県 G・M 40歳 男性

5月2日 三重県 H・H 26歳 男性

5月2日 三重県 H・H 26歳 男性

3月31日 鳥取県 H・T 59歳 男性

4月5日 京都府 A・T 女性

4月8日 K・O 31歳 男性

4月8日 K・O 31歳 男性

5月5日 香川県 R・H 11歳 男性

5月6日 兵庫県 Y・T 8歳 男性

5月9日 佐賀県 M・I 31歳 女性

5月9日 大阪 G・H 30歳 男性

5月9日 大阪 G・H 30歳 男性

「よかったー」「よかったー！」
梅雨空の定まらぬ日であった。高知市内から、40人ほどのお年寄りのグループが館の見学にみえた。桂浜で遊んで、龍馬記念館を見学し、お隣の国民宿舎「桂浜荘」で食事を楽しむというプランである。地区公民館のお仲間であった。ご高齢で少々体の不自由な方もおられたが、皆さんお元気に見えた。実際、足に自信のある方は浜から記念館までのかなりの急坂を、散歩がてら歩いてこられた方も少なくない。

龍馬記念館の、大きな言うより最大の課題は、地元入館者対策。実は、年間入館者13万人という全国的にも個人顕彰館では屈指の実力を誇る「龍馬」のだが、地元の入館者が1割に満たない。近すぎて見えない理屈なのだろうか。「桂浜・龍馬の再認識」、これが館のテーマになっている。

私は対策の一つに、お年寄りや子供たちへのアピールが大切だと考えている。これからの子供たちにはもちろん、お年寄りにも、孫に龍馬を語ってほしいと思うからだ。自分の少年時代の龍馬を思い起こしてもらいたい。

さて、そのグループは見学も済ませて昼食となった。44人分お弁当が並んだ。ところが食事が終わって、一人分お弁当が手付かずになっていた。どうも一人はぐれたらしい。しかし迷うような所ではないし、何か用事でもしているのだろうと待つこと3時間。足取りを追ったが分からない。館内も2回、3回と回ってみた。手がかりなし。雨が降り出した。急に暗くなって夕闇も迫ってくる。たまりかねて警察にも捜索依頼となった。



翌朝6時半、「桂浜荘」から電話がかかった。「おばあちゃん無事でした。よかったです！」。こちらも久しぶりに聞いた本気の「よかったです！」。こちらも泣きながら「よかったです！」。
梅雨最中、ある日の龍馬記念館であった。

1万人の子供たちに龍馬を！
昨年の12月、高知市内のすし屋での出来事を書いてみた。カウンターの前に立った20代の男前の板さんにすしを食べながら、「坂本龍馬は好きですか」と質問をしたところ「名前を知っていますけど、興味を持ったことないですね」と、てらいもなく言われてしまった。

会話が途切れてしまったかと一瞬思ったが、君の夢は何ですか？との質問に「独り立ちをしたいです。高知は狭いので、大阪あたりに出ないと無理かな」との彼の返事を聞いた時に、私は彼にこんなことを話した。

例えば、大阪のすし屋さんです。お客さんが来てカウンター越しに話しかけたとしましょう。今の、私みたいに。君が高知出身と聞くとお客さんは必ず坂本龍馬のことを質問するでしょう。その時、もし、君が「興味がありません」といったその途端に君は、君の夢を実現してくれるパートナーを失くすでしょうね。その時、初めて彼は真剣に坂本龍馬を受け止めたような気がしたものである。

夢と希望をばら撒きながら



支配人 山川 龍己 坊ちゃん劇場

*** 編集者より ***
平成3年から18年までに寄せられた「拝啓龍馬殿」をまとめた本『はいたら待ちゆうぎ』は、2回目の校正が終わり、装丁の作業も終盤に入りました。幻冬舎ルネッサンスより全国発売いたしますので、お近くの書店でお求めいただけます。7月30日発売です!!

花結び

龍宮祭の朝、当館や桂浜荘、桂浜水族館の職員ら10名程度が、「装道」の先生方にゆかたと帯を着付けていただき、その姿で一日、お客様の応対をさせていただくことになりました。

その帯の結び方が変わっていて、両面に色または柄がある半帯で一輪か二輪の花びらを形作り、花弁として割り箸の先に黄色や赤のフェルト布で作ったものを差し込み、まるでパッと花が咲いたように帯を結ぶ「花結び」

という、華やかでかわいくも清楚に着付けていただきました。日本古来の着物も（機能的でない、自分ひとりでは着付けることができない、手入れが大変 etc）なかなか着る機会がなくなった今、背筋が自然に伸び、気持ちも清々しく爽やかに、立ち居振る舞いも優しくなれる、ゆかた姿で受付をやらせていただいたことは、初めてのよい機会でした。お客様には「ゆかた姿で出迎えてもらえたわあ、涼しそうでいいね



えり」と言っていただけで、自然と笑みのこぼれる一日でした。
弘田 みるみ

「桂浜龍宮祭」 “桂浜に、大漁旗の龍が踊る”

～龍宮行列、ペンギンダンスも～

4月20日(日)、イベント「桂浜龍宮祭」が開催されました。1月26日「桂浜再生促進協議会」の立ち上げからわずか三ヶ月の準備期間で行われた第一回目の行事です。地元の皆様が高知の名勝地桂浜からも「地域ぐるみ」で何かを発信しなくてはという思いが一つの形として動き始めたわけです。

当日は天候にも恵まれ、各地区から集められた140枚の大漁旗が浜に敷き詰められ、色鮮やかな龍が現れました。龍宮行列では浦戸小学校の児童

が浦島太郎や乙姫様などに仮装して賑やかにパレードを行い、山本氏制作・動く木像の親子亀は浦島太郎を乗せて大活躍でした。また本物のペンギンも行列に加わり、婦人部数名の着ぐるみダンスも登場しました。花帯の接待では「装道」着付け教室のご協力の下、帯で作った花々を浴衣にあしらった「花・人・土佐であい博」のタスキを桂浜水族館と国民宿舎桂浜荘の皆さんにもかけていただき、当記念館の職員や中学生にも協力してもらいました。そして、おぜんざいとおにぎりの接待は好評のうちあつという間に完食となりました。

4月23日には総括を行いイベ



ントにおける反省点と今後への課題を話し合い、再び「であい博」に関連した展覧会第2弾の11月開催に向けて、始動開始です。
中村 昌代

入館状況

2008年6月20日現在(開館以来5,987日)

◆総入館者数	2,140,464人
◆2008年度最多入館	5月4日 2,321人
2008年度最少入館	4月9日 91人
2008年度1日平均入館者数	352人
◇最多入館	1993.5.3 3,700人
◇最少入館	2004.10.20(台風のため) 8人

編集後記

2年後、NHKの大河ドラマが「龍馬伝」に決まった。龍馬に“追い風”になるのは言うまでもない。同時に、全国からやってくる龍馬ファンの皆さんの期待にどう応えるか、大きな“宿題”をもらった感じがする。インターネットの龍馬検定も、初級編アクセスは予想を超える1万件を、開始3ヶ月を待たずして越えた。「拜啓龍馬殿」の書籍化も7月末出版を目標に予定通り進んでいる。そう、科学警察研究所による、お龍の写真鑑定も終わって、コーナーが出来た。「前向きに」が職員皆の合言葉である。飛騰66号にその思いをこめた。7月から館のメイン企画「出会いの達人・龍馬」展は、8月まで後期「恩師編」に入る。(モ)

館だより「飛騰」第66号(年4回発行) 表紙題字:書家 沢田 明子 氏
発行日 2008(平成20)年7月1日
発行 高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知県浦戸城山830
TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休
入館料 一般500円・高校生以下無料
(特別企画展料金のため)

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください